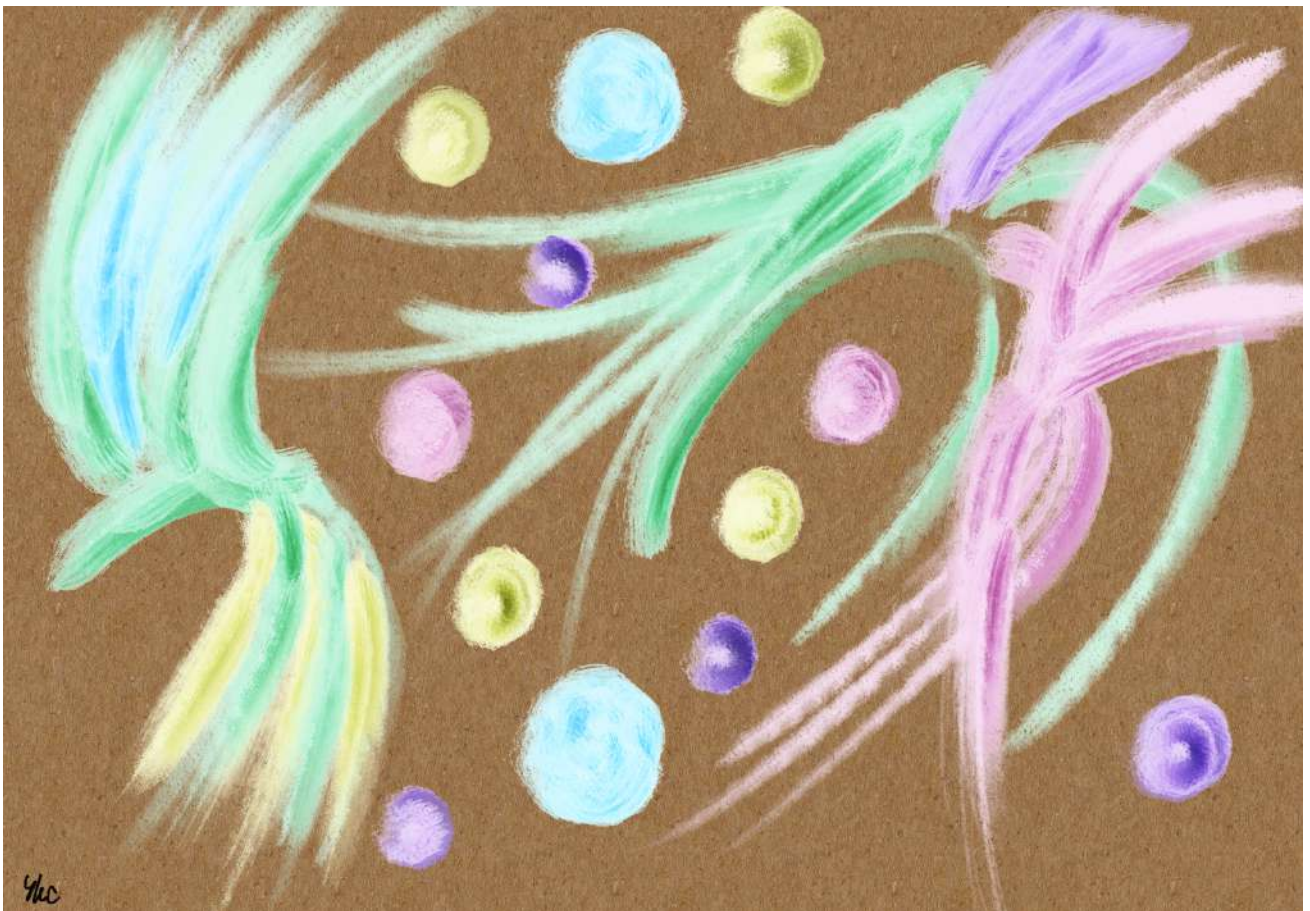

発達理論の学び舎

Back Number: Vol 323

Website: 「[発達理論の学び舎](#)」



No.1574 時の遊戯_Play of Time

目次

- 6441. 今朝方の夢/対象の背後にある歴史や物語
- 6442. 陶酔感の中で
- 6443. またとない1日と自己
- 6444. 今朝方の夢
- 6445. アルフレッド・ヒッチコックの映画から
- 6446. 今日の予定/今朝方の夢が暗示する今後の歩み
- 6447. 仮眠中のビジョン/複数の意識段階を描く映画作品
- 6448. 深い呼吸の味わい/プラド美術館とヒエロニムス・ボス美術館
- 6449. 謎と共に居続けること/名付けと創作
- 6450. 今日鑑賞予定の映像作品
- 6451. 今朝方の夢
- 6452. 『ウェイクニング・ライフ(2002)』を見て
- 6453. 今朝方の夢/『生きる(1952)』を見て
- 6454. 本日見た10本の映像作品より
- 6455. 今朝方の夢
- 6456. ダイモーンの覚醒/列車の旅/映像美を味わうこと
- 6457. 呼吸/自給自足生活に向けて
- 6458. 今朝方の夢
- 6459. 呪いとしての才能やアイデンティに関する問題提起をする映画作品
- 6460. 今朝方の夢

時刻は午前5時半を迎えようとしている。今、外の世界は闇と静寂さに包まれている。また今日は、寒さにも包まれていると言っていいかもしれない。現在の外気は1度である。そして今夜はマイナス3度まで気温が下がる。今日はそれほどまでに寒い、晴天に恵まれるようだ。明日が午後から雨の分、今日は室内でも日光を浴びたいと思う。

今朝方の夢について静かに振り返っている。今朝は深夜に1度目を覚ました。なぜ目を覚ましたかという、外気との気温差から、寝室の窓に水滴が付着しており、それが滴る音が聞こえてきたからである。目を覚ました時にはちょうど夢から覚めたタイミングだったので、目ぼけていて、水滴が滴る音が少し不気味な音のように聞こえた。それが水滴が滴る音だとわかって、その箇所をペーパータオルで拭くことにした。そこからまた眠りの世界に戻っていった。

最初に目覚めた時に見ていた夢についてはもう記憶がない。その夢も印象的なものだったが、今となっては記憶の彼方にある。再度眠りについて見えていた夢の中で、私はバスに乗っていた。辺りの雰囲気から察すると、そこは日本ではなく、外国のようだった。しかもその近くには港があって、バスの窓から遠くの方を眺めると、太陽で輝く海が見えた。

私はバスに乗りながら、近くにいた2人の見知らぬ女性と、小中高時代の男性の友人(HY)と話をしていた。どうやら私たちはバスを乗り継いでフェリーか何かに乗る必要があるらしく、バス停を探していた。2人のうち1人の女性が、次のバス停が乗り継ぎのバス停ではないかと述べたが、そのバス停には中学生ぐらいの子供たちがたくさんいて、彼らと一緒にバスに乗ると騒々しいのではないかと彼女が述べた。確かにそうかもしれないと私は思ったが、そもそも次のバス停が乗り継ぎのバス停ではないように思われた。というのも、私はその近辺の地理に明るかったからである。

私の判断で、さらにその次のバス停で降りることにした。そこはショッピングモールの敷地内のバス停であり、バス停は、ショッピングモールの2つの建物をつなぐ道の近くにあった。今朝方の夢で覚えているのはそのくらいである。

今日は1日中自由に時間を使うことができる。そうしたこともあり、今日も旺盛に映像作品を見ていき、合わせて作曲実践をしていく。今は、映像作品の息抜きとして作曲実践を行なっているような感

覚があるぐらい、映像作品を通じての学びに集中している時期だ。今日はマスメディアを取り上げた映画を何本か見ていき、その他のものについてはまた別のテーマに関するものを見ていこうと思う。

そう言えば、一昨日に優れた彫刻や優れた写真について考えていた。優れた彫刻や優れた写真は、対象物の背後にある歴史や物語を含めて形を生み出す特徴がある。別の表現で言えば、対象物が持つ歴史や物語を刻み出しているように思えるのである。

素晴らしい映画が、それが実際に描いているもの以上のことを私たちに感じさせるのもまた同じ理由かと思う。そこには映し出されたものの背後にある何かが映像を通して明るみになっているのだ。今日もまた、対象の背後に横たわる歴史や物語を感じさせてくれる映像作品と出会えることを楽しみにしている。フローニンゲン:2020/11/29(日)05:45

6442. 陶酔感の中で

時刻は午後8時を迎えた。今日は確かに気温が低かったが、澄み渡る夕暮れ空を眺めることができ、心が洗われるような気持ちになった。マリンブルーの空の向こう側に、穏やかな橙色の夕日が沈んでゆく様はとても美しかった。その光景が今でもまだ脳裏に残っている。

冬の時期のオランダの晴れた日の夕暮れ空は本当に綺麗だ。それを見ているこちらの心が本当に澄み渡るような気持ちになる。こうした小さな幸せを日々大切にしていこう。

昨日は9本ほど映像作品を見て、今日は8本ほど見た。今、映像作品を見ることと音楽を作ることが自分に生きる喜びを与えてくれていると実感する。映像作品を見ている時や音楽を作っている時は、陶酔感の最中に自分がいることに気づく。その瞬間に陶酔していること。つまり、今ここと一体化し、常に没頭没入する形で生きていること。生きることの力強さと愉悦がそこにあるように思える。

生命が静かな喜びに満ちていて、それが躍動しながら少しずつ何処かに向かって進んでいることを実感する。明日もそうした実感が得られるように生きたい。自らを真に喜ばせてくれることに純粋に従えば、きっとそうした実感が明日も得られるだろう。

自分を知ること、そして世界を知ること、自己を表現するを行き来する形で日々が進行していく。確かに今日も創作活動に従事していたが、今は再び前者に力を入れている時期のようだ。今夜は少し読書をしよう。

自分の言語の限界が世界に対する言語的認識の限界を生み出し、自分の感覚の限界が世界に対する感覚認識の限界を生み出す。言語と感覚の目覚め、意識の目覚めの必要性を思う。言語・感覚・意識が日々目覚めていく。僅かばかりだが、毎日新たなものが見えてきて、新たなことが感じられる。小さな目覚めの体験を積み重ねていくこと。その継続を大切にしていく。

今日は2つほどジャン・リュック・ゴダール監督の作品を見ていた。ゴダール監督の作品はどれも哲学的で面白い。洞察に溢れる観点や言葉がいくつも作品の中に散りばめられている。今日見ていた作品から考えていたのは、形は何かを語るということである。映像や音もまた何かを語る。そうした語りに対して敏感になり、語られたものをさらに自分なりに語るということを行っていく。

ある感覚の持続的体験を曲や絵として形にしていく試みを続けていこう。今この存在感覚を形にしていくのだ。それを曲を通して行う場合、短いものでいい。たった1行の言葉にも打たれるものがあるのだから、限界まで切り詰めた曲を作っていく道を模索していこう。1分もあればそれは十分可能なのではないかと思われる。

明日も実験・実践・探究・創作を行う。明後日もまたそうした活動に従事していく。

静かな夜の世界が広がっていく。そこに静かな希望が満ちている。フローニンゲン:2020/11/29
(日)20:15

6443. またとない1日と自己

時刻は午前5時を迎えた。今日から新たな週が始まる。それはまた1つ新しい週であり、この人生において1度しかない週だ。そう思うと大変貴重な週のように思えてくる。このように、日々は常に新たなものであり、この人生においては1度しかないものなのだ。ヘラクレイトスが述べた「同じ川に2度入ることはできない」というのと同じであり、日々は絶えず新しく、またとないものである。

そのように考えてみると、今日存在する自分というのもまた2度とない存在なのではないかと思えてくる。自己を含めた万物はいずれもその瞬間に固有の立ち現れとして存在しているのだ。今日の自分は、この人生における唯一の自分である。万物は皆そうした貴重性を持っている。

今の気温はマイナス1度であるが、思ったほどに寒くはない。書斎の中にいるのだから外の寒さが体感的にいかほどかは分かりかねるが、例年であれば、外の気温がマイナスの時には部屋のヒーターをつけていた。ところが今はヒーターをつけておらず、それどこから、寝室と書斎の窓は少し開けて換気をしている。

寝室のヒーターは少し前から入れるようにしているが、書斎のヒーターはまだほとんど使わなくていい状況なのだ。暖かい格好をしていれば、室内ではヒーターを使わなくても耐えられるので、しばらくこの形で生活をしていこうと思う。書斎が寒くて仕方なくなってきたらヒーターをつければいい。

ここ最近では映画を見る本数がさらに増え、昨日は8本ほど見ていた。一方で、映画評論関係の書籍や論文を読むことによって、映画を紐解く観点を得ていく必要性を感じており、もうしばらくしたらまた日中にも文献を読んでいこうと思う。今は夜の就寝前ぐらいにしか文献を読んでいない。そんな折、昨日は米国カリフォルニア州パロアルトにあるソフィア大学のマーク・アラン・カプラン教授の仕事と出会った。カプラン教授は、インテグラル理論の観点から映画について研究を進めており、数多くの論文を執筆していることを知ったのである。

昨夜、ざっとカプラン教授の論文タイトルを眺めてみたところ、いずれも非常に興味深いと思ったので、全ての論文を読んでいこうと思う。とりあえずまず1つダウンロードし、それをデスクトップに保存した。合わせて、カプラン教授のYoutubeチャンネルも登録し、投稿されているビデオは料理をしながらでも全て音声で聞いていこうと思う。

昨日はマスメディアに関する映画を2本、ドキュメンタリーを1本見た。映画については『スポットライト 世紀のスcoop(2015)』と『ニュースの真相(2015)』を見て、ドキュメンタリーとして『i-新聞記者ドキュメント(2019)』を見た。このドキュメンタリーは森達也監督によって製作されたものなのだが、過去に見た森監督の作品はいずれも示唆に富む。過去見たことがあるのは、オウム真理教に潜入し、そこでの記録を撮った『A(1998)』『A2(2001)』、そして2014年に作曲のゴーストライター騒動で

世間を賑わせた佐村河内守(さむらごうちまもる)氏を追ったドキュメンタリー『FAKE』はいずれも興味深い作品だった。森監督の作品でまだ見ていない『311』を今日の昼にでも見ようかと思う。その他にも、政治経済関係の作品と、引き続きゴダール監督の映画作品も見ていく。フローニンゲン:
2020/11/30(月)05:23

6444. 今朝方の夢

時刻は午前5時半を迎えた。昨夜、インテグラル理論の観点から映画を探究している研究者を探していたところ、ソフィア大学のマーク・アラン・カプラン教授の仕事と出会った。これから彼の仕事を丹念に追ってみようと思っていたところ、それではインテグラル理論の観点から音楽を探究している研究者がいないかを調べておきたいと思った。先ほど少しばかり調べてみたところ、数名ほど研究者がいることを知った。彼らの論文のタイトルを眺め、少しばかり中身を調査してみたところ、それほど自分の関心を引くものではなかった。

私は別に音楽評論を行いたいわけではなく、あくまでも音楽を作り続けたいという思いを持っており、作曲に何か活かすものがないかと思って調べていたのだが、そうしたニーズに合致するものはほとんどなかった。とはいえ、論文ではないが、1冊ほど“Improvisation, Creativity, and Consciousness: Jazz as Integral Template for Music, Education, and Society (2014)”という書籍はまだ読んでおらず、先ほど初めて知ったので、今後この書籍の購入を検討したいと思う。文献に関してはまずは映画関係のものを読んでいく。とりわけ、カプラン教授の論文を全て読むことから始めていこう。

今朝方は1度夢で目が覚めた。その時に見ていた夢はかなり不気味な内容だった。具体的には覚えていないのだが、2つの選択肢が私に与えられていて、いずれも死と恐怖に関するものだったように思う。どちらの選択肢を採用しても、いずれも結果がグロテスクなものに終わることが見えていて、選択することを躊躇している自分がいた。改めて考えてみると、「選択しないという選択」という第3の選択も本来存在するはずであり、そうした選択肢が浮かばなかった自分を思う。夢の中の私はそうした選択肢が浮かばないほどに、恐怖に縛られていたのかもしれない。この夢の主題は間違いなく死だった。

1度目を覚ました後に見ていた夢の中で私は、実際に通っていた中学校のバスケットコートの上にいる。時刻は午後、そして太陽が燦々と降り注ぐような天気だった。グラウンドには誰も人がおらず、バスケットコートにもほとんど人がいなかった。どうやら今は、本来授業中のような感じだった。

私は、同じバスケット部に所属していた小中高時代の親友(SI)とテニス部に所属していた親友(AF)と一緒にバスケットをして遊んでいた。3人で話しながら、気ままにシュート練習を楽しんだ後、私はふと、彼らにサッカーの変わったトラップの仕方を披露した。ちょうど近くにサッカーボールもあったので、私は上空に思いっきりボールを投げ、それを右足でトラップして見せた。

その時に、通常のトラップのように、ボールが落下する際の速度と重力を加味した、足の甲で行う通常のトラップではなく、ボールをわざと地面に着地させ、その着地の瞬間に、足首をひねりながらボールの勢いを殺すトラップを披露した。このトラップでボールを止めると、ボールにバックスピンがかかり、いったんはボールが自分の足元から離れるのだが、離れたボールがバックスピンによって再び自分の足元に戻ってくる変わったトラップである。このトラップを見ていた2人の親友はとても面白がって、自分たちでもやってみたいと述べ始めた。私は彼らにその方法を教えようと思って顔を上げると、校舎の窓からは、後輩の女子たちが私たちが遊んでいる様子を見ていることに気づいた。フローニンゲン:2020/11/30(月)05:56

6445. アルフレッド・ヒッチコックの映画から

時刻は午後7時半を迎えた。今朝方の気温はマイナス1度であり、そこから徐々に気温が上がり、今に至る。夕方からの雨がまだしきりと降っている。予報では明日は天気が回復するようなので、午後にも街の中心部に買い物に出かけようと思う。

今朝方にキッチンの電球が切れてしまったので、街の中心部で新しいものを購入したいと思う。サイズを確認するために、古い電球を忘れずに持参しよう。

今日は結局、合計7本ほど映画やドキュメンタリーを見ていた。今朝方に1時間半ほど音声ファイルを作っていたことを考えると、今日もまた十分に映像作品を見れたと思う。今日見た作品の中でも、『ヒッチコック／トリュフォー(2015)』が印象に残っている。本作品は、映画監督にとってはバイブルである「映画術 ヒッチコック／トリュフォー」にまつわるドキュメンタリーだ。

「サスペンス映画の神様」とも称されるイギリスの映画監督アルフレッド・ヒッチコックとフランスの映画監督フランソワ・ロラン・リュフォーとのインタビュー音源と、10人の映画監督たちがいかにこの本から影響を受けたかを解説している。

ヒッチコックが大切にしていた「サスペンス」という概念は、元々は「吊るす(宙吊りにする)」という意味であり、本来は恐怖とは関係ないということが印象に残っている。この概念は作曲においても大切に思える。聴衆を宙吊り状態にして次の瞬間に生じる音へ関心を持ってもらう状態を持続すること、つまりサスペンスの持続は作曲においても大事であり、ヒッチコックの映画作法から学ぶことが多いように思える。ヒッチコックはその他にも、沈黙によって何かを語らせる優れた技術を持っており、沈黙で聴衆に聴かせるという技術も作曲において重要であり、この点についてもヒッチコックの映画作品から学んでいきたい。

また、ヒッチコックは「時空間変容のマジシャン」とでも形容できるような作品を数多く残していった。ヒッチコックは映像を通して、時間と空間を巧みにコントロールしたのである。特に空間に関しては、カット割りの技術を使い、そこには数学的な正確さと美しさがあるとのことである。時空間を変容させることを音を通じて行ったのはバッハであり、バッハとヒッチコックの思想や技術には共通したものがあるかもしれない。その点についても探求をしたい。

ヒッチコックのいずれの作品にも夢のような世界観があるという点も興味深い。ヒッチコックの作品には非日常的な何かが必ずある。ヒッチコック自身が、「平凡ではつまらない」と述べていることがそれを物語っている。

心理学の観点からすると、ヒッチコックの作品には人間の深層心理が描かれている。そして、「誰にも罪がある」「誰にも秘密がある」「誰にも善悪の葛藤がある」という点が巧みに描かれている点に共感する。罪、秘密、善悪の葛藤を消し去ろうとするのではなく、それらを引き受けながら生きるというのは、クリント・イーストウッド監督の思想に似ていると言えるかもしれない。

今日はヒッチコックの歴史的な名作である『サイコ』誕生を映画化した『ヒッチコック(2012)』を見た。明日は実際に『サイコ』を見る予定であり、ヒッチコックのその他の作品も明日に見るかもしれない。
ローニンゲン:2020/11/30(月)19:58

6446. 今日の予定/今朝方の夢が暗示する今後の歩み

時刻は午後5時半を迎えた。ほぼ曜日感覚が消失していることもあり、毎日できるだけ曜日を思い出すようにしている。今日は火曜日だ。

辺りは静けさに満ちていて、世界は深い闇に包まれている。今日は午前中に少し小雨が降るかもしれないとのことだが、昼前から雨は止むそうなので、午後には街の中心部に買い物に出かけようと思う。ジョギングがてら、運動と息抜きを兼ねて買い物に出かけよう。

今日もまた映像作品を積極的に見ていく。今日は、アルフレッド・ヒッチコックの作品を少なくとも1つ見る。まずはヒッチコックの代表作である『サイコ』を見たい。現在契約しているU-Nextでは残念ながら、これまた代表作の『めまい』を見つけることができなかった。今後視聴可能になったら見たいと思う。

映画以外には、いくつかドキュメンタリーを見ていく予定だ。映像作品の鑑賞が今とても良質なインプットをもたらしてくれている。それは自己や世界をより深く知ることのインプットにつながっているのみならず、創作上の貴重なインプットになっている。

本日の創作は、映画から得られた知識や感覚をもとに進めていくことを意識してみよう。ただしその時には、頭で曲を作ろうとしないことを心がける。頭で曲を作っているのは、心に響くものが不足してしまいがちになる。内的感覚をそのまま形として吐露していくことに喜びを見出している自分がいて、その方が訴えるものがあるのではないかと思う。もちろん実験的に頭で考えながら曲を作っていくこともあるが、基本的には内的感覚をありのままに音として形象化させることを大切にしていこう。

昨日見たドキュメンタリーの中でヒッチコックが述べていたように、心を動かされ、心を動かすことが創作上大事である。自分の内側に喚起されたある種の感動を形にし、他者の内側を動かすこと。そこに創作上の鍵がある。

静けさの中に浸っていると、心がより一層静けさに満ちてくる。今朝方も少しばかり夢を見ていたが、今朝の無意識の世界は落ち着いていた。何かしらの真実が明るみになる主題の夢があったこ

とを覚えている。また、6歳年上の元サッカー日本代表の選手3人と和気藹々と話をする夢があった。

グラウンド脇のクラブハウスのカフェのような場所で少し話をし、芝生のグラウンドの上で話をしていた記憶がある。3人はとても温厚で優しく、彼らと話し終えた後、フリーキックの名手であった別の元サッカー日本代表の選手からフリーキックの技術について直接教えてもらっていた。何度かキックを試してみるも、人間の壁に見立てたポールに当たってしまい、フリーキックの難しさを改めて知った。指導をしてくれていたその選手も優しさに満ちていて、気遣いをしてもらいながらコツを色々話してくれた。

そのような夢を見た後に、最後の夢の場面としては、ある高層マンションの1室から脱出するというものがあった。見知らぬ白人の男性がその部屋に突然やってきて、私が手に持っていた水晶のような玉を奪おうとしていた。その玉は私だけではなく、誰か知らないがその他の人たちにとっても大事なようであり、そうしたことから私は、その白人男性に捕まらないようにする必要があった。そこで私は、東京タワーかスカイツリーぐらいの高さのあるマンションの上層階のベランダから飛び降り、しばらく下降した後、宙にうまく浮いて地面に着した。

この夢の場面は興味深い。高い場所に辿り着き、そこで自分だけではなく他者にとって有益な何かを獲得し、それを持ち帰るために再び地上(社会)に戻っていくことを暗示しているのではないかと思う。今映像作品の鑑賞に没頭する形で探究を進めていて、ここから映像作品に関する学術書を100冊ほど購入しようとしている自分がある。映像作品を毎日数多く見ていく生活は今後しばらく続くだろう。ここから3~4年ほど映像作品を見続けていけば、随分と世界が広がるに違いない。それを経て、映像作品の鑑賞と学術書から得られたことを共有するフェーズに入っていくというのは、確かにこれから自分が歩いていく道のように思えてくる。フローニンゲン:2020/12/1(火)06:11

6447. 仮眠中のビジョン/複数の意識段階を描く映画作品

時刻は午後7時半を迎えた。静かな夜の世界を眺めながら、今日1日を振り返っている。こうした振り返りの時間を持つことの有り難さ、そして振り返りがもたらす静かな充実感を実感できていることの有り難さを感じる。

今日の午後に仮眠を取っていると、印象的なビジョンを見た。ちょうど意識がコーザル状態からサトル状態に移行して目覚めようとしているときに、無数のハトが空を舞っていく姿を見た。ビジョンの中の世界の空は少しばかり雲があったが、概ね晴れだった。私は草原に仰向けになっているかのような視線でハトが勢い良く空を飛んでいく姿を眺めた。夢のシンボルに豊かな意味が内包されているのと同じように、きっと仮眠中のビジョンにも豊かな意味が隠れているに違いない。それを少しずつ紐解いていこう。

今日の午後に街の中心部に出かけたとき、ちょうど市場が開かれていたので、そこに出店しているオーガニックの野菜や果物を扱う店で椎茸を6つほど購入した。この椎茸はとても立派であり、価格に関しても卸しが無いためか、Ekoplazaというオーガニックスーパーの椎茸よりも安い。明日以降天日干しをして食することが楽しみである。

市場だけではなく、昨日の朝に切れたキッチンの電球を新しく購入しようと思って色々と店を回って見たが、結局どこにも置いていなかった。キッチンの電球は丸いタイプではなく、細長いものであり、なかなか入手しづらいものようだった。

明日、近所のスーパーに売られていなければ、不動産屋に連絡をして、便利屋に持って来てもらおうと思う。一昨年あたりにも電球が切れ、そのときには不動産屋に連絡をして便利屋が持って来てくれたので、今回もそのように対応すれば良かったが、メールをする時間も惜しい形で日々の探究生活と創作活動に励んでいるため、明日スーパーになければ明日にでも不動産屋に連絡をする。

数日前から、インテグラル理論の観点から映画を探究しているマーク・カプラン教授の動画の音声を料理をしながら聴いている。その中で興味深い調査があった。全ての意識段階をカバーした映画は過去存在せず、現実的にそれは非常に難しいが、多くの人々に訴えかけ、過去に興行収入で歴史的な大きさになったものの大半は、少なくともいくつかの意識段階をカバーしているとのことである。

例えばアバターにおいては、ナヴィという先住民族を描いた部族的段階、戦争(戦い)を描く衝動的段階、合理性を働かせるビジネスパーソンが現れる合理的段階、ナヴィの先住民族とビジネス

パーソンを調停させようとする観点を持つ人間を描く相対主義的段階など、確かにいくつかの意識段階をカバーしている。マトリックスにおいても、預言者という神話的な段階や、科学技術に焦点を当てた合理的段階、そうした合理的な世界観を超えた意識段階の特性が映画の世界の中に散りばめられている。

興行収入において、アバターに次ぐ歴代3位のタイタニックについても考えてみたが、こちらは上述の映画よりもカバーしている意識段階は少ないように思える。ただし、多くの客を動員するために、いくつかの意識段階に響く形の映画世界を創り上げていくというのは確かに理にかなっているように思える。

カプラン教授の講義資料のPPTや論文を読むことによって、少しずつ映画を見る観点が増えている。そもそもインテグラル理論を学ぶ特徴として、認識の拡大がもたらされることを考えてみると、カプラン教授の研究成果を通じて、単に知識が増えているというよりも、これまで認識の光が当たっていなかった領域に光が当たるようになって来たと言えるかもしれない。事実、作品中のカットや音楽、そして作品が描く世界の社会的コンテキストや歴史的背景などに自然と意識が向かい、そこからまた多くのことを汲み取っている自分がある。今夜もまたカプラン教授の論文を少しばかり読み、明日の映像作品の鑑賞をさらに実りあるものにしていきたい。フローニンゲン:2020/12/1(火)

20:02

6448. 深い呼吸の味わい/プラド美術館とヒエロニムス・ボス美術館

時刻は午前3時半を迎えた。今朝の起床は午前3時だった。今朝の目覚めはとても良く、快眠を取れたことを実感した。昨夜は寝る前に、意識的にヨガの実践を行った。このところは、バランスボールで単に背中をほぐすだけで寝ることが多かったが、一昨日の入眠の様子を観察したところ、寝る前にヨガを行っていた時の方が入眠が速やかであり、尚且つ質の高い睡眠が取れているように思えたので、昨夜はヨガを比較的入念に行った。特に、ゆったりとした深い呼吸を意識してヨガを行うと、意識の状態が変わり、眠りの意識への移行が速やかであった。

昨日は映画やドキュメンタリーを合わせて8本ほど見たのだが、映像作品を鑑賞しているときに、ついでに深い呼吸をする実践も同時に行っていた。深い呼吸に固有の深い味があることが改めて実

感でき、映像作品を見ているときには絶えず深い呼吸をするように心がけてみようと思う。これによって脳内へ酸素が十分に送られるだけでなく、呼吸を通じて全身の細胞が活性化されるであろう。深い呼吸がもたらす何とも言えない快感というのは、おそらくそれと関係しているだろう。

今朝は3時に起床したこともあり、今日は映画とドキュメンタリーの鑑賞と作曲実践に充てる時間が十分にある。幸いにも今週と来週はほとんどオンラインミーティングもないので、自分の取り組みに邁進することができる。

深い睡眠がもたらされていたからか、今朝方は夢をほとんど見ていなかったように思う。記憶を辿ろうとしてみるが、覚えていることがほとんどない。微かに残っているのは、感覚的に中立的な夢を見ていたという感覚記憶だけである。場所は日本とも外国とも言えないようなものだった。夢の中の自分が話している言語は日本語だったように思う。また、友人や知人は夢には出て来ておらず、見知らぬ人が1人か2人いたような記憶がある。

昨日見たスペインのドキュメンタリーの中で、『謎の天才画家 ヒエロニムス・ボス(2016)』が印象に残っている。この作品は、オランダの画家ヒエロニムス・ボスの謎に迫るドキュメンタリーである。天国と地獄が混ざり合った独特な世界が描かれた「快樂の園」という作品の秘密を、プラド美術館協力のもと解明していくという内容だ。この作品を見て、「快樂の園」があるプラド美術館(マドリッド)に行ってみたくと改めて思った。

2年前にスペインを訪れたときにはバルセロナしか滞在しておらず、今度はマドリッドやその他の都市にも足を運んでみたいと思っていた。ボスをきっかけにして、マドリッドに足を運ぶことのイメージが生まれた。また、オランダの北ブラバント州の都市「デンボス (Den Bosch)」にあるヒエロニムス・ボス美術館 (Jheronimus Bosch Art Center) は前々から訪れてみたいと思っていた。片道3時間弱で行ける距離なので、コロナが落ち着いたらぜひ足を運びたい。ちょうど今はコロナもあり、また寒さが厳しくなってくるので、少し先になるが春先にでも訪れてみよう。フローニンゲン:2020/12/2(水)

03:51

時刻は午後7時半を迎えた。暗く、冷たい夜の世界が広がっている。

もう季節はすっかり冬となり、午後4時を迎える頃はもう随分と暗かった。冬が深まるに応じて、自己と人生も同時に深まっているのを実感する。

今日は結局、合計で10本ほど映像作品を見た。午前3時に起床して活動に集中していたこともあり、十分な数の映像作品を見ることで、非常に幸福な気持ちに浸っている。

今日見た作品の中でも、カズオ・イシグロの同名小説を映画化したイギリスの映画『わたしを離さないで(2010)』のテーマを思い出す。再生医療とクローン技術がより進歩すれば、この作品で描かれていたように、臓器を提供するためだけに生まれてくるクローン人間が今後出現するかもしれない。この作品では、創作活動を通じて魂の有無を問うシーンがある。それも含めて、この映画だけではないが、映画は人間と社会が直面する問題について考察する機会と題材を与えてくれることを実感する。

自己の内側にある無数の謎。外側の世界の無数の謎。謎を解こうとするのではなく、謎と共に居続けるという生き方をしていこう。内面世界も外面世界も無数の謎で構成されていて、世界とはすなわち謎なのだから。

幾分古いドキュメンタリー作品だが、『ミステリアス・ピカソ/天才の秘密(1956)』も面白かった。この作品を見ながら、2年前に訪れたバルセロナの記憶が蘇ってくる。バルセロナでピカソ美術館に足を運んだ記憶が蘇ってきて、同時に、バルセロナの街並みの記憶が蘇ってきたのである。こうしたドキュメンタリー作品は、探究上及び創作上の刺激となり、多くの洞察をもたらしてくれる。実際に、この作品を見ることによって、日々の作曲実践と絵画の創作に関して試してみたいことがいくつか湧いてきた。早速今夜から試してみたいものがあるので、就寝前に絵を描くときにそのうちのいくつかを試してみたい。

描くというのは名付けることであり、曲を作るのもまさに名付けることである。内的感覚に対して、音を通じて名付けていくことが作曲なのだという気づき。音を通じて世界を創造していく試みと、音を

通じて自己の物語を紡ぎ出していく試み。そして、その曲を表現するのに新しい言葉が必要となるような曲を作っていくこと。それが進化を通じた作曲行為なのだろう。

音は自己の物語を生み出し、同時に新たな世界を生み出す。それはまた自己を育むという循環構造が見える。創造活動の隠された秘密とはそれなのだ。

晩年のピカソの純粋な無邪気さ。ピカソは描くことを通じて純粋さを獲得していった。ピカソの創作活動の様子を見ていると、ピカソが感じていたであろう創作に伴う愉悦が伝わってくる。

明日もまた創作と映像作品の鑑賞に没頭する1日を過ごす。今、自己創造と世界創造が一つになろうとしている。フローニンゲン:2020/12/2(水)20:02

6450. 今日鑑賞予定の映像作品

時刻は午前4時を迎えた。今朝の起床は午前3時半だった。一昨日より、就寝前のヨガの時間を少し増やし、より入念に身体をほぐし、ゆったりとした呼吸を味わうことをしてみたところ、入眠がさらに速やかになり、睡眠の質もこれまで以上に向上した。

振り返ってみると、一時帰国する前はこのような形で就寝していたのだが、一時帰国を挟み、少しばかりヨガの実践が疎かになっていたことに気づく。起床後だけではなく、夜寝る前に意識的に少しばかりヨガを行う時間を増やしたところ、このような形で睡眠の質が向上したことは嬉しい。睡眠はちょっとしたことでその質が左右されることがわかる。また、睡眠の質の向上によって、日々がより充実したものになることもすぐに理解される。

昨日は合計で10本ほど映像作品を見た。今日も午前3時半に起床することができたので、日中の活動時間は十分にある。映像作品の長さによるが、今日も昨日と同じくらいに作品を見ていこうと思う。現時点で既に決めているのは、映画としては昼に、黒澤明監督の『生きる(1952)』という作品を見る予定だ。その他には今のところ、ウィルス感染を主題にした『CURED キュアード(2017)』と、哲学者ハンナ・アーレントを取り上げた『ハンナ・アーレント(2012)』を見る。ドキュメンタリーに関しては、『おいしいコーヒーの真実(2006)』をまずは見ようと思う。それ以外の映画やドキュメンタリーについては、その時の気分と関心に応じて選択していく。

既に映画リストには615本ほどの未鑑賞作品が記載されている。ある映画から別の映画を知ることが連鎖的に起こっているの、平均すると毎日少なくとも7本ほど映画を見ているが、リストは溜まっていく一方である。今はまだ映画鑑賞を本格的に始めたばかりの段階にあるのだから、リストが溜まっていくというのはしかるべき現象だろう。まさにある特定分野の学術探究を始めたときのように、読みたい論文や学術書を次から次に見つけ、それを文献リストに加えていくのと同じである。

映画の作品は既に615本ほどリストに溜まっていて、映画関係の学術書のリストは100冊近くになっている。リストに掲載されていない書籍はまだたくさん存在していて、映画が実に様々な学術領域から探究されていることを知る。リストに掲載している100冊の洋書だけではなく、先日の一時帰国で日本から30冊近く映画関係の書籍を持って帰ってきた。それらを少しずつ読み進めていき、それと同時に、これからも旺盛に映画作品を見続けていくことを行っていきたい。

数日前にも言及したように、映画は創作活動上の大きな刺激とインプットになっている。また、「ムービーヨガ」という映画鑑賞を通じた治癒と変容の実践があるように、映画鑑賞が自分の心を癒し、変容を促進していることも実感する。1つの映画を見終わると、そこにマイクロな治癒とマイクロな変容が起こっていることに気づく。端的には、ある映画を見る前の自分と見え終えた自分はもう別人なのだ。そうしたことを促す力が映画にはある。フローニンゲン:2020/12/3(木)04:23

6451. 今朝方の夢

時刻は午前4時半を迎えた。ここからあと4時間ほどは暗い状態が続く。午前8時半ぐらいになってようやく空が晴れるというぐらいに日の出の時間が遅くなっている。また今日は、午前中から明日の朝にかけて小雨が降りがちのことだ。

それでは今朝方の夢を振り返り、今日も早速創作活動と映像作品の鑑賞に取り掛かりたい。夢の中で私は、欧州のどこかの国の空港にいた。飛行機から降りて空港内を歩いてみると、どうやらそこはフィンランドのようだとわかった。私は乗り継ぎでこの空港に降り立ち、ここからまたどこかの国に向かうようだった。おそらくそれもまた欧州内の国だろう。

飛行機から降りてすぐに、私に声をかけてくる人がいた。声のする方に顔を向けると、フローニンゲン大学のイノベーション研究センターでインターンをしていたときにお世話になっていたエスター・ボ

ウマ博士がいた。ボウマ博士は笑顔でこちらに話しかけ、そこから私たちは一緒に空港内を歩くことにした。すると、ボウマ博士は幼少期の頃にフィンランドで過ごしていたことを話してくれた。しかもなんと、空港の窓から今この瞬間に見えている住宅地の一角に住んでいたようだ。

飛行機の乗り継ぎにはまだ時間があったので、私たちは一度空港から外に出て、ボウマ博士の案内の下、空港近辺を散策することにした。空港から左手の方にボウマ博士が住んでいたアパートのような建物が見え、その周りにもアパートやマンションがたくさん建っていた。いずれの居住用の建物に共通していたのは、日本のように洗濯物を外に干す習慣を持った家が多いということだった。欧米で洗濯物を干すというのは基本的に考えられず、洗濯物が外にぶら下げられている光景というのは貧民街でしか見られない。ところが、ここでは数多くの世帯が外に洗濯物を干すことをしている光景がとても新鮮に映った。ボウマ博士と私は、あえて左手の住宅地の方を散策するのではなく、空港から見て右手の方に向かっていくことにした。そちらには山道があり、山から遠くの海が見張らせた。

しばらく山道を歩いていると、突然街並みが開けてきた。そこには北欧諸国の街並みの雰囲気というよりも、どちらかというバルセロナやパリの街並みのように西歐的な雰囲気があった。住宅が密集するエリアのある大きな道に出てきたときに、遠くの方に日本人の知人の姿が見えた。そしてその方の周りには知らない日本人たちが十数人ほどいた。

するとどうやら、その知人の方が、ある新興宗教の長の座に就くことになったことがわかった。その方は就任演説をその場で初め、就任に際しての喜びを表現する一環として、突然道路の上を走り始めた。すると、そこからミュージカルが始まった。街中で突然、日本人の知人を含めた見知らぬ人たちがミュージカルを始めたのである。

ミュージカルが始まった瞬間は、私は唾然として鑑賞者側に回っていたのだが、気がつくとも自分も役者側にいた。そして、私は突然逆立ちを始め、そのまま街中を進むことを行った。その意図は、プログラミング言語のRのプログラミングコードを身体で表現したらどうなるかを示すことだった。厳密には、これまでプログラミンコードを書くことによって実現できていた諸々のことを、身体を通じて表現するとどうなるかを示したいようだった。

最初街中の人たちは、私の行動を理解していないようだった。単に逆立ちをして街中を歩くパフォーマンスのように思っていたのである。私は明確な意図を持ってそれを行っていたので、なんとか意図を伝える工夫はないかと考え始めた。手だけ地面に着けていることの意味を模索していると、気がつけば私は再び空港の中にいた。

我に返ると、私の目の前に、古書を販売している人がいることに気づき、その人に話しかけてみると、先ほど一緒に空港の外を散策していたボウマ博士だった。ボウマ博士は笑顔で古書を買っていたが、貴重な本が随分と安く売られているなど思ったところで夢から覚めた。フローニンゲン：

2020/12/3(木)04:45

6452.『ウェイキング・ライフ (2002)』を見て

時刻は午後8時を迎えようとしている。今日は肌寒い1日だったが、天気予報とは異なり、ほとんど小雨が降らなかった。どうやら今夜から明日の未明にかけて小雨が降るらしい。

今日は結局、合計で7本ほどの映像作品を見た。今日は「一瞬一生の会」の受講者の方々のリフレクションジャーナルを読み、それに対するコメントを音声ファイルとして作成していて、それに2時間弱ほどの時間を充てていた。そうしたこともあり、映像作品の本数は7本程度だったが、音声ファイルの中で映画についてもたっぷりと1時間弱ほどかけて話をしたことによって、見た映像作品の学びが身になることにつながったように思う。映像作品は学びの宝庫であるから、見っぱなしにするのではなく、鑑賞最中のメモだけではなく、文章の形にしたり、音声ファイルの形にしていきたいと思う。

今日見た作品の中で強く印象に残っているものを挙げるとすると、まずは『ウェイキング・ライフ (2002)』という作品になるだろう。この作品は、実写映像にデジタル・ペインティングを施した形で作られていて、アニメーションの美しさは『アンダン ～時を超える者～ (2019)』や『ゴッホ 最期の手紙 (2017)』を思わせる。ストーリーも興味深く、胡蝶の夢を思い起こさせるように、自分が夢の中にいるのか、現実のなかにいるのか判断ができなくなった青年の主人公が、そのことを確認しようと街へ飛び出し、さまざまな人と出会い、彼らとの対話を通じて、夢と現実、生と死、人間存在について考えていくという哲学的な内容を持つ。

この作品を見ながら、人間の魂や輪廻というのは、集合意識の記憶そのものなのではないかということを考えさせられた。また、死や絶望から生に光を放射することの大切さについても考えさせられるシーンがあった。その他にも、どんな時も旅立ちの気持ちでいることの重要性、自分に与えられた色を用いてこの世界を描いていくことの尊さなどについても考えていた。

フランスの映画批評家アンドレ・バザンは、「映画は「神の記録」である」と述べている。神は絶えず創造に従事していて、映画は創造の産物であるから、映画というのは神の記録としての性質を持っていると言えるのかもしれない。創造というものが、聖なる瞬間に、聖なる瞬間として生まれることについても考える。日々自分の内側から生み出される曲や絵は、まさに聖なる瞬間の顕現かつ産物なのだ。

今日の映像作品の鑑賞体験も実に有意義であった。明日もまた旺盛に映像作品を見ていきたいと思う。フローニンゲン:2020/12/3(木)20:08

6453. 今朝方の夢/『生きる(1952)』を見て

時刻はゆっくりと午前4時を迎えようとしている。今朝は3時半前に起床した。実は偶然なのだが、昨日も今日も、起床した時間は3:23と全く同じ時間だった。体内の中で同じサイクルが回っていて、それが昨日と今日の日覚めを同一にしたのかもしれない。

目覚める前に少しばかり夢を見ていたようだが、内容に関してはあまり覚えていない。夢の舞台は外国であり、誰か1人の見知らぬ男性と日本語で話をしていただけを覚えている。夢の世界には光があまりなく、モノクロの世界の中にいるかのようなようだった。夢の世界と同じく、今日は1日中光の見えない曇りがちの日になるようだ。来週の火曜日までは、ほとんど太陽が見えないような日が続くという予報が出ている。

本日もまたいつものように、旺盛に映像作品を見ていき、その合間合間に作曲実践を行っていく。映像作品から得られるインプットを通して、それを曲というアウトプットの形にしていく。今は両者のバランスがとても良く、どちらも自然な形で実践が積み重なっていく。映像作品の鑑賞は、確かに娯楽的な要素もあるが、自分の中ではそれは探究活動の側面が強く、実践行為である。

昨日見た映画について改めて思い出している。昨日見た中で印象に残っている作品として、日本を代表する映画監督の黒澤明監督による『生きる(1952)』という作品がある。この作品のストーリーは、癌の宣告を受けた余命幾ばくもない公務員の主人公(市役所勤務の課長)が、生きる意味を失い、そこから生きる意味を取り戻し、再び自分に仕事に向かい、自らの役割を全うするというものだ。テーマとしては、官僚主義への批判や人生の価値や意義に対する哲学的な主題を持つ。

理不尽な官僚システムの中で、自分にできる仕事とは何かを目覚め、それを最後までやり遂げた主人公の姿。彼にとっては自分の最後の役割は、子供たちのために公園を作ることだった。

物語の後半において、通夜の席で市役所の関係者の1人1人が亡くなった主人公についての思い出を語っていき、最初は「市民課長のくせに」ということや、「他の課の仕事の領域にまで首を突っ込みやがって」というような批判をしていたが、線香を上げに来た警官の話によって、みんなの心が動かされる場面がある。そこで全員が一致団結するかに思われた。しかし翌日からは、再びほぼ全員がお役所マインドに戻ってしまう。

だが最後のシーンでは、主人公が作った公園で楽しく遊ぶ子供たちが映し出され、結局お役所体質は変わらないままだったが、それでも1人の名も知れない人間の仕事は確かに存在し続け、主人公の魂は公園として生き続けたかのように描かれていた点に感銘を受けた。これこそが理不尽さを受け、己の役割を全うしていく生き方の規範に思えた。絶望を乗り越えようとするのではなく、自身の癌という絶望と、どうしようもないお役所体制という組織的癌という絶望を受け入れ、公園を最後まで作り上げた主人公の生き方には大変打たれるものがあった。

人生の意味や生の輝きは、死を見つめることによって得られる死からの照り返しを通じてもたらされるものなのかもしれない。つまり、人生の意味や生の輝きは、死からの反射によって得られるものなのかもしれないということだ。であれば、人生の意味や生の輝きというのは、死の輝きでもあると言えなくもない。フローニンゲン:2020/12/4(金)04:08

6454. 本日見た10本の映像作品より

時刻は午後8時を迎えた。振り返ってみると、今日もまた非常に充実していた。

今朝は朝の3時半前に起床し、そこから今に至るまで、旺盛に映像作品の鑑賞をし、作曲実践にも打ち込めていた。今日も結局、合計で10本の映画・ドキュメンタリーの作品を見ていた。確かに今は数多くの作品を手当たり次第に見ているが、作品の選定基準のようなものが明確にあり、完全にランダムで映像作品を見ているわけではない。自分なりの関心事項に沿ったものを見ていき、関心の幅と深さを緩やかに拡張させていくことが自然と実現できているようなサイクルがある。これはとても良いサイクルだ。このサイクルを引き続き回していく。

今日のテーマを挙げるとするならば、1つは政治が挙げられる。このテーマに沿って、『ハンナ・アレント(2012)』『マーガレット・サッチャー 鉄の女の素顔(2012)』『グッバイ、レーニン！(2003)』という3つの映画をまず午前中に見た。そして政治をテーマにした映画の休憩として、『僕とカミンスキーの旅(2015)』を見た。その後、昼には黒澤明監督の名作の1つである『羅生門(1950)』を見た。これは傑作であり、また別の機会に感想を書きおきたいと思う。

そこから第2のテーマとして、現在先進国で密かに進行している薬物社会への問題意識から、薬物関係の映画やドキュメンタリーを見ていた。映画に関しては、これまた昨日の『ウェイクング・ライフ(2002)』と同じようにアニメーションで描かれた『スキャナー・ダークリー(2006)』という作品が興味深かった。2つの映画や共通するテーマもあるが、根幹として扱っているものが異なるので、同列に比較することはできないが、どちらかという昨日見た『ウェイクング・ライフ(2002)』の方が考えさせられることが多く、今日見た『スキャナー・ダークリー(2006)』は、すでに自分が持っている知識の域を超えるような内容はあまりなかったように思う。

とはいえ、それでも得ることが全くなかったわけではなく、この作品が制作された2006年において、薬物社会と監視社会の到来を示唆している点は注目に値するであろうし、6Gの時代が訪れたら、この作品で描かれているようなホログラムの活用(悪用)が進むであろう点も注目に値する。

そこからは、ドキュメンタリーとして『麻薬中毒の町 ～レイ・セローが見たアメリカ～(2017)』と『レイ・セローが見た この子に“心の薬”は必要か(2010)』を薬物をテーマとして視聴した。どちらもBBCのドキュメンタリーであり、時間としても60分程度とコンパクトにまとめられているが、レイ・セローのその他のドキュメンタリーも色々と洞察の提供や問題提起をしてくれる素晴らしいものが多い。

政治や薬物関係以外としては、『TOMORROW パーマネントライフを探して(2015)』というドキュメンタリーがとても印象に残っている。書き残したメモを見ると、今日一番メモをしたのはこの作品だろう。この作品は、「農業」「エネルギー」「経済」「民主主義」「教育」の5つの分野に焦点を当て、パーマカルチャー、トランジション・タウン、ゼロ・ウェストなど、世界各地で新しい取り組みを行っているパイオニアたちを次々と紹介していく内容だ。この作品から考えさせられたことは数多く、今はそれらをここで書くことをしない。

今日の締め括りとして見たのは、大友克洋監督の『老人Z(1991)』というアニメーション映画である。この映画が1991年に世に送り出されていたことに素直に驚いた。作者の大友監督は、当時から日本の高齢化社会の到来と介護問題について鋭い洞察があったのだろう。また、「第六世代のコンピューター」と呼ばれるものが機械学習をしていたシーンがとても印象的であり、AIに関する知識も大友監督が持っていたことに驚かされた。実は昨日も大友監督の『MEMORIES(1995)』という3話構成のアニメーション映画を見ていて、1つ1つの作品が非常に興味深く、大友監督の世界観に惹かれるものがあった。

明日はテーマというよりも、敬愛する辻邦生先生がお勧めしていたルキノ・ヴィスコンティ監督の『白夜』『ベニスに死す』『家族の肖像』のうちどれかをまず見たい。その日の状態に応じて、ヴィスコンティ監督の作品を2つ見てもいいかもしれない。それは明日に判断しよう。いずれにせよ、明日もまた今日と同じぐらい充実した日になるであろう。フローニンゲン:2020/12/4(金)20:18

6455. 今朝方の夢

時刻は午前3時半を迎えた。今朝の起床は午前3時であり、この3日間はこのくらいの時間に起きている。そのきっかけとして、夜寝る前のヨガをこれまで以上に入念に行うようになったことを挙げるができるかもしれない。深い呼吸を伴ったヨガの実践によって、入眠が速やかになり、睡眠の質がさらに上がっていることが早起きにつながっているようだ。就寝時間は相変わらず夜の10時であるから、睡眠の質の向上によって、これまでよりも短い時間の睡眠で十分になっているように思う。

午前3時台に起床することができると、1日の活動時間が増え、映像作品の鑑賞や創作活動に打ち込む時間が十分に確保できることが嬉しい。昨日は合計で10本ほど映像作品を見ることができ、今

朝の起床時間からすると、今日もまた同じぐらいの数の映像作品を見ることができるかもしれない。すでに今日見る予定の作品をいくつか選定していて、まずはそれらを順に見ていこう。U-NEXTを通じて作品を見ると、観賞後に推薦作品が3つほど表示される。そこで何か偶然にも面白そうな作品が出てきたら、それらを見ていこうと思う。

現実と夢とのあわいに漂っている自分が先ほどまでいた。ひょっとすると、人は絶えず現実と夢とのあわいに生きていると言えるのかもしれない。そうしたことを思わせてくれる映画をここ最近何本か見ていた。

そのようなことを考えながら、今朝方の夢を振り返っていた。夢の中で私は、立派なホテルのエレベーターに乗っていた。エレベーターの中には、小学校時代の女性友達が2人(AS & HK)いた。1人は中学校まで一緒に過ごし、もう1人は小学校卒業と共に別の中学校に進学した。私はエレベーターの中で2人と少し話をしようと思ったが、エレベーターは目的階の26階に一気に上がっていき、身体のバランスを崩すほどの速さだったので、2人とはほとんど話をすることができなかった。

エレベーターが目的の階に到着するかしないかのところでふと小学校時代の記憶が蘇ってきた。気がつくと、私は教室にいて、どういうわけか、多くの女性友達が順番に自分に話しかけてきた。その教室にはあまり人がおらず、雰囲気は放課後のようだった。私はあまり人と話をする気分ではなく、1人になりたかったので、話しかけてきた女性友達に悪い気持ちにさせないように注意しながら接して、なんとか1人になろうとした。だが本当は、1人1人ともう少しゆっくと話をしたいという気持ちがあった。

気がつくと私は、再びエレベーターの中にいた。26階まで一気に上がっていたエレベーターがなぜか5階で止まり、そこで私は一度間違えて降りてしまった。自分の間違いにはすぐに気づき、6〜7台あるエレベーターのうち、また別のエレベーターがすぐにやってきたので、それに飛び乗った。私と一緒に見知らぬ人が数名そのエレベーターに乗って来て、行き先は同じ階のようだった。今度は無事に26階に到着し、受付を済ませようと思った。

先ほどエレベーターに乗っている時に見知らぬ人と話をしていた他のだが、その時に、アメリカ組は26階、イギリス組は15階で宴会がなされるということを聞いた。アメリカ組というのはアメリカで生活し

たことのある者たちのことを指し、イギリス組とはイギリスで生活をしたことのある者たちのことを指す。それで言えば私はアメリカ組であり、26階に行くことは正しかった。

26階でエレベーター降りると、目の前には立派な宴会会場が広がっていた。早速会場に入ろうとしたところ、滑って派手に転んでしまった。私は、ダロウデイルのチェック柄のスリーピースのスーツを着ていて、格好は立派なぶん、そこで転んでしまうというのはみっともなくもあり、同時にそれが滑稽であった。こけて地面に伏した時、誰も見ていないかと思ったら、ある年配の落語家の方が見ていて、大丈夫ですかと声をかけてくれた。私はその気遣いに感謝をした。

するとその方がふと、「昨日の試合も見えていましたよ」と述べた。ちょうど昨日は、サッカーの大会に出場しており、どうやらその試合を見に来てくれていたらしかった。そのことについてもお礼を述べてから、私は会場の中に入った。会場の中に入ると、物凄い数の人が入った。彼らはすでにテーブルに腰掛けていて、思い思いにお互いに話をしていて、

ちょうどあるテーブルの一角で、小学校時代の友人たちが集まっていることに気づき、そちらに向かった。そこで私は、養護クラスに入っていた1人の友人と話をした。彼の近況を尋ね、彼と少し話をした。私は別の会場に移動しようと思った。すると私は、もう1つの宴会会場である学校の教室に瞬間移動した。今度は人でごった返しておらず、むしろそこには人はほとんどいなかった。そこで振る舞われる料理は、ほうれん草のパスタがメインディッシュだった。

教室の1つのテーブルにそれがポツリと置かれていて、パスタを見たときに、それならちょうど昨日自分で作って食べたことを思い出した。結局私は何も食べないことにした。すると再び私は先ほどまでいた立派なホテルに瞬間移動し、今度はある会場これから始まるゲームについての話を聞いた。どうやらこれから、24時間耐久の鬼ごっこが開始されるとのことだった。

私は逃げる役とのことであり、とりあえずエレベーターに乗って1階まで行き、電車に乗ろうと思った。すると、またしても5階でエレベーターが止まったので、一度そこで降りて、1階までは急ぎ足で向かおうかと思ったが、ちょうど別のエレベーターがやって来たので、それに乗って1階に向かった。

気がつくと私は、高校時代に過ごした社宅に到着していた。母に事情を説明し、鬼役の友人が来ても居留守を使ってもらおうようお願いした。すると早速、小中学校時代の親友(HS)がやって来た。家の呼び鈴がなり、母が応対してくれた。私は部屋の奥の方に行って、母と親友の会話を遠くから聞いていた。

すると、親友が私の帰りの時間を母に尋ねたらしく、母はなんと答えたらいいのかわからなかったようなので、それを私に聞きに来た。母にはその場で柔軟に対応してもらいたかったのですが、こちらに聞きに来たことに対して不満があったが、聞きに来てしまったものは仕方ないので、午後6時に戻ってくるということを親友に伝えてほしいと述べた。すると親友はあっさりと引き返したが、かなり怪しまれたと思った。私はもうどこかのタイミングで捕まるなと思った。

もう一つ行き先として候補に挙げていた岬に行って、自首でもしようかと思った。私の中で、これは単なるゲームであり、24時間逃げ続けるのは心身にとって大きな負担であるように思っていたこともあり、最初からどこかのタイミングで捕まえることを計画していた。その方が夜にゆっくりできるだろうし、何よりも捕まってから友人たちと話ができると思ったのである。フローニンゲン:2020/12/5(土)

04:11

6456. [ダイモーンの覚醒/列車の旅/映像美を味わうこと](#)

時刻は午後7時半を迎えた。今日もまた人生のある1日が静かに終わりに向かっている。

日々新たであり、日々が固有の輝きを持って過ぎていくことを感じている。平穏かつ静かな環境の中で、自分の取り組みに従事し、満足感と共に過ぎていく毎日。

振り返ってみれば、今日は映画を10本ほど見ていた。今日は午前中にオンラインミーティングがあったことを考えると、特に何もなかった昨日と同じだけの数の映画を見れたことは喜ばしい。

今日のテーマ設定の1つとして、企業の不正や企業買収を取り上げることにして、それらに関する映画を2つ見た。明日はマスメディア関係にするか、宇宙開発関係にするか、はたまた意識の状態ということテーマにして、8年ぶりに『アルタード・ステーツ／未知への挑戦(1979)』を見てもいいかもしれないと考えている。そうした大きなテーマ設定をしておいて、最後はその日のその瞬間の自

分がその作品を今見たいのかどうかに判断を委ねることにしている。明日に出会える作品をまた楽しみに、今日も良質な睡眠を取りたいと思う。

守護霊としてのダイモーン。それは自分を守ってくれているだけではなく、自己の創造も根底で支えてくれている。そしてそれが今、その力をより高めていることを感じる。そのようなことを一昨日に思った。

昨日見た映画の中で、スイスの山々の中を爽快に走り抜けていく列車のシーンが描かれていた。それを見ながら、列車の旅に思いを馳せていた。この調子だと、年末年始はフローニンゲンの家で過ごすことになりそうだ。コロナが春に落ち着いていれば、初春に、列車でベルギーの主要都市を巡る旅に出かけていこうかと思う。そして初夏には、ドイツを列車で巡る旅に出かけよう。

まだミュンヘンやベルリンには行ったことがなく、両都市には気になる美術館があるので、それらを訪れる計画を立てている。ベルギーの旅にせよ、ドイツの旅にせよ、フローニンゲンを起点にすれば、列車で巡ることができる。いつもと同じような形で、それぞれの都市に4~5日間ほど滞在するようしよう。

そのような旅の計画に思いを馳せていると、再び映画のことについて考え始めている自分がある。映画の古典を通じて、人間が普遍的に有している特性や普遍的に抱える問題について考察していく。また、人間社会に普遍的な特性や問題についても考えを深めていきたい。昨日も今日も古典をいくつか見たのだが、そうした観点からの学びが実に多いのだ。

その他に考えていたこととしては、現代の映画のほとんどは音楽が付随しているため、音楽芸術としての側面もあるが、映画はやはり視覚芸術としての側面が強いことは間違いなく、その点において、1つ1つの作品の映像美を味わっていくことを絶えず念頭に置きたい。例えば、今日見たAIを題材にしたスペインの映画『EVA<エヴァ>(2012)』が描く雪山は本当に美しかった。また、数年ぶりに見た『ライフ・オブ・パイ/トラと漂流した227日(2012)』という作品の中の深海の様子や満天の星空もまた息を呑むような美しさがあった。こうした映像美は、意識に直接訴えかけて来て、それがマイクロなレベルでの意識の治癒や変容を導いていることを感じる。

今すぐにはなくていいので、映画美学の探究も始めていこう。映画の享楽に日々浸る形で探究を進めていく。すなわち、映画がもたらす幸福感を通して日々の探究を進めていくのである。明日もそれを忘れず、それを実行させていく。フローニンゲン:2020/12/5(土)19:58

6457. 呼吸/自給自足生活に向けて

時刻は午前5時半を迎えようとしている。今、外の気温は0度だが、書斎と寝室の窓を開けてもそれほど寒くない。オランダの家は、家の中が暖かく、家の中にいると外の寒さを感じることはほとんどない。

一昨日と昨日は、午後には太陽の姿を見ることができ、映画を見ながら日光浴をしていた。この時期の太陽の光は本当に貴重であり、日光を浴びれるときに、紫外線に気をつけながら適度に日光を浴びることが心身の健康において大切だ。今日は夕方から雨のようであり、明日は朝から夜まで小雨がちの1日になるようだ。

昨日ふと、先日の日本の一時帰国中に感じていたことを思い出した。人口の多さと国土の狭さゆえか、とりわけ都市部においては、満員電車の密度がそのまま街の中にフラクタル構造として現れているかのように思えた。街の中を歩いていて、息苦しさを感じたのはそのためかもしれない。あれだけ人が多く、過密な状態だと、息苦しさを感じてしまうのは当然だ。人間もまた動物であり、狭い檻にぎゅうぎゅう詰めにした動物たちがストレスを感じてしまうように、都市生活者というのは絶えずそうしたストレスに晒されているように思えた。

呼吸と心身の状態は密接につながっているため、空気が悪く、息が詰まってしまう場所で生活することはできないと改めて思った。そのようなことを考えながら、いつかシベリウスのように、畑付きの家を購入することも検討していた。

先日見た『TOMORROW パーマネントライフを探して(2015)』というドキュメンタリーに触発されて、できる限り自給自足の生活を実現させていこうと思ったのである。将来的に、以前から注目しているバイオダイナミクス農法の技術を学びにドイツの農園にしばらく滞在するのもいいかもしれない。

ふと、毎日畑の世話をしていた父方の祖父を思い出す。シベリウスや祖父が行なっていたように、自分の畑を散歩したり、世話をするのはいい運動になるだろう。移住先として検討しているフィンランドは、冬の時期は雪が積もるため、冬の時期の畑の世話は少し大変かもしれないと思ったが、シベリウスはその時期にどのようなものを植え、どのように手入れをしていたのかが気になる。

昨日は合計で10本ほど映画を見た。2日連続で10本映画を見たのだが、それでも特に映画を見過ぎたという感覚はない。むしろ不足感があるぐらいだ。今日もまた旺盛に映画を見ていこう。昨日までは「映画」と「ドキュメンタリー」という言葉をあえて分けていたが、どちらも広義には映し出された画という点で共通しているので、これからは「映画」と統一して表現していこうと思う。今日もいくつかテーマを決めており、それらのテーマに沿った映画は選定済みなので、あとは何を選ぶかの問題であり、そして今日偶然に出会う作品も少し見ていこうと思う。フローニンゲン:2020/12/6(日)05:39

6458. 今朝方の夢

時刻は午前5時半を迎えた。今、1羽の小鳥が高らかに鳴き声を上げた。それは静寂さに包まれた世界の中に響き渡り、闇の世界に吸い込まれて行った。

このところは午前8時半を迎えてようやく明るくなっていくような状態であるから、あと3時間ほどは闇と付き合うことになるだろう。冬の時期には、外の世界が闇に包まれる時間が多くなり、こうした冬を毎年経験していると、外の世界の闇との付き合い方が上手くなってきただけでなく、自分の内側の闇との付き合い方も上手くなってきたように感じる。

内外世界は密接につながっていて、相互作用をしているため、外の闇の世界と向き合うことを通じて、内なる闇の世界とも自然と向き合っていたのかもしれない。冬はまだまだこれからが本番と言っても過言ではないので、今年の冬が終わる頃には、内側の闇の世界と付き合うことがさらに上手くなっているだろう。

そのようなことを考えていると、今朝方の夢をふと思い出した。夢の中で私は、ある著名な日本人経営者かつ投資家の方と話をしていた。その方と話をしていた場所は、サッカーチームのクラブハウスのような場所だった。施設にあるカフェは落ち着いていて、人もあまりいなかったもので、そこでその

方と話をしていたのである。どうやらその方は、サッカーにハマっていて、ちょうどこれから友人を集めてサッカーをすることである。私もサッカー好きであることを伝えると、後ほど行われるサッカーに私も混ぜてもらえることになった。

そこから私は話題を変えるかのように、自分が映画好きであることをその方に打ち明けた。最近見た映画について話をすると、その方も映画好きとのことであり、今度映画に関する対談をしようということになった。そこで夢の場面が変わった。

次の夢の場面では、私は国道沿いを歩いていた。しばらく国道を歩いていると、ある交差点の横断歩道の前に、高校時代の友人たちがたむろしている姿が見えた。私は偶然彼らとそこで会えたことが嬉しくなり、早速彼らに声をかけてみた。すると、彼らは何やら真剣な表情をしていて、どうやら今、ゴルフをしている真っ最中とのことだった。国道でゴルフをするのはおそらく禁止されていると思うのだが、友人たちはそんなことは気にもかけず、ドライバーで思いっきりショットを放っていた。

ある友人(HH)がショットを打ち終えた後、彼に話しかけてみた。すると、彼は髪型を変えていて、髪も奇抜な色に少し染めていた。それが似合っていたのでそれを褒めようとしたところ、少しムスツとした表情だった。どうしたのかと尋ねてみると、どうやら昨日、私の父が彼の店に訪れ、そのときに対応したのが友人であり、レジで彼の手と父の手がぶつかってしまったらしい。そんなことは大した問題ではないと思うのだが、そう言えば父はその件について笑いながら昨日話してくれていたことを思い出した。しかし、友人の方はそれを重く受け止め、友人は彼の母と真剣にその問題を考えていたようだった。明日、友人の母が間に入る形で、三者間で謝罪と問題の解決に当たるとのことだった。

私は友人がその件をそこまで重く受け止めているとは知らず、明日の話し合いが速やかにいくように、2つほどこちらから質問をした。1つは状況確認の質問、そしてもう1つが問題解決に向けた質問である。そして最後に、私の父に伝えて欲しいことはないかを友人に確認した。

彼との話し合いが終わると、携帯電話に1通のメールが届いていることに気づいた。メールを確認すると、どうやら現在受講中のオンライン学習コースの支払いが未払いとのことだった。しかしコースの受講料は開講前にすでに支払っていて、少し前にも同じ趣旨のメールが届き、先方に確認して問

題はすでに解決したはずだった。なのにまた同じメールが送られてきたと思って、先方の対応を少々残念に思った。杜撰な経理とカスタマー対応の悪さを不審に思ったのである。今朝方はそのような夢を見ていた。フローニンゲン:2020/12/6(日)05:56

6459. 呪いとしての才能やアイデンティティに関する問題提起をする映画作品

時刻は午前7時半を迎えた。日曜日が静かに終わりに向かっている。明日からはまた新たな週を迎える。今日は結局8本ほどの映画を見た。日々映画を数多く見ていると、1日が経つのがあっという間である。映画鑑賞に合わせて創作活動にも従事していることもあり、日々の時の経過はあっという間である。それだけ毎日が充実しているということである。

今日は呪いとしての才能、そしてアイデンティティをテーマにした映画を見ていた。ポピュラーな作品として、久しぶりに『スパイダーマン(2002)』と『ボーン・アイデンティティー(2002)』を見た。前者の作品は呪いとしての才能をテーマとし、後者の作品はタイトル通り、アイデンティティをテーマにしている。どちらも2002年に上映されたことが興味深い。

スパイダーマンのコスチュームは、赤と青を基調としたまさに星条旗を象徴している。舞台はニューヨークであり、9・11後のアメリカを励まし、国としての一体感を取り戻させようとするような政治的な意図もこの作品から感じる。中でも重要なテーマとしては、才能が持つ呪いとしての側面だろう。主人公のピーター・パーカーは、最初自分の能力に目覚めた時、それを発揮することに喜びや楽しみを見いだしていた。

しかし、犯罪の防止など、良かれと思って能力を発揮したことに対して、新聞者の編集長のように、スパイダーマンの行為を認めない存在が現れ始めた。他の人が持たないような特殊な能力というのは、社会から阻害される元になってしまう可能性があることをここに見る。まさにピーターも述べているように才能とは「呪い」でもあるのだ。贈り物としての才能は、悲劇的なことではあるが、現代社会では往々にして歓迎・承認されないことがあり、人を不幸にさせてしまうこともあるのだ。

そしてもう1つ重要な点としては、潜在能力の目覚めと自我の関係を挙げることができるだろう。ピーターの友人のハリーの父も科学実験によって潜在能力に目覚めるが、彼はピーターと異なり、悪の道に落ちて行った。端的には、エゴに乗っ取られ、悪を暴走させる形で自分の能力を使い始めてし

まったのだ。現代社会においても、ハリーの父のような形で、自分の能力を私腹を肥やすためやエゴを満たすために活用してしまう人間たちがいる。ピーターのように、天賦の才能というものが呪いであるということを引き受けながらにして社会善を果たしていく人間など一握りであり、むしろハリーの父親のような人間の方が大多数のように思えてならない。明日以降も残りのスパイダーマンシリーズを見ていこうと思う。

マット・デイモン主演の『ボーン・アイデンティティー (2002)』も久しぶりに見た。この作品を通じて、アイデンティティの捏造・操作の可能性、そして複数のアイデンティティを持つことに伴う精神的混乱の危険性について考えさせられる。そもそも、アイデンティティというものがいとも簡単に国によって作られてしまうということ、さらにはグローバル化の進展によって、複数のアイデンティティを持つことを余儀なくされている人がいることを知る。グローバル化の進展においては、複数のアイデンティティを持つことを生み出すのとは逆に、アイデンティティを溶解させることも引き起こしているように思える。そうした投げかけをこの作品はしているように思えた。この作品が世に出て20年弱となるが、その傾向は加速しているのではないだろうか。

アイデンティティに関して言えば、今日その他に見た2つの邦画『かもめ食堂 (2005)』と『寄生獣 (2014)』においてもアイデンティティを考えさせられるシーンがあった。前者においては、見落とされがちなシーンかもしれないが、主人公のサチエが営む食堂にフィンランド人の男子学生がやってきて、彼が突然「ガッチャマン」の歌詞を知りたいという場面がある。サチエは「誰だ、誰だ、誰だ～」の部分しか思い出せないのだが、その部分はまさに、己とは何者なのかを問う歌詞である。それを尋ねたフィンランド人の学生も、自らが何者なのかを探求していたのであろうし、日本からフィンランドに移住して1人で食堂を開いたサチエもまた自分が何者なのかを探し求めていたように思えるのだ。いや、ストーリーが進むにつれて、登場する人物の全員が、自分は何者なのかを問うているように思えたのである。

『寄生獣 (2014)』という作品においては、人間が自らのアイデンティティを問うのではなく、寄生獣としてのパラサイトが、「自分はどこからやって来て、どこに行くのか？」を問うているところが興味深く思えた。現在世界を震撼させているコロナウィルス然り、彼らのような生命の存在理由や存在意義とは何なのだろうか。人間だけではなく、他の生命の存在理由や存在意義を問うきっかけを与えてくれた作品であった。フローニンゲン:2020/12/6(日)19:56

6460. 今朝方の夢

時刻は午前5時半を迎えようとしている。昨日と今日はゆったりと、午前5時前に起床した。しかも時刻は全く同じの04:52だった。その前の3日間は、午前3時頃の同時刻に起床していたことが興味深い。起床にもサイクルがあるようだ。

今、小雨が降っている。どうやらその雨は、夕方まで降り続けるようだ。12月を迎えて1週間が経ったが、今年の冬は今のところそれほど寒くない。この時期に部屋のヒーターをほとんどつけていないというのは驚きである。こんなことは過去4年間において1度もなかったように思う。確かに就寝時には湯たんぽを使っているのだが、日中は書斎のヒーターをつけることはほとんどない。朝方につけたことがあるのは数回程度だ。

昨日の夕方に、白い渡り鳥たちの大群が霧がった空を空を舞っていく光景を目撃した。あまりの数に驚いたが、白い姿をした彼らが空を覆い、優雅に舞っていく姿は圧巻であった。渡り鳥たちはこれから暖かい地域に向かっていく。自分はこの土地に残って過ごすか、心はどこかに向かって一步一步前進していく。内面がゆっくりと深まる方向に歩いていくだけだ。

そのようなことを考えながら、今朝方の夢について振り返っている。夢の中で私は、見慣れない学校にいた。どうやら、これから教室で成人発達理論に関する講義をするようだった。その学校は大学ではなく、小中高のいずれかであり、雰囲気として高校よりも小中学校の可能性の方が高いように思われた。そんな学校に大人たちがやってきて、これから成人発達理論の講義を聞くことになっており、私は講師役を務めることになっていた。

講義を行う教室がどこかを受付のような場所で確認すると、講義開始までまだ随分と時間があるようだった。空き教室を借りて、そこで待機しようと思ったところ、教室を借りるのがどうやら有料らしかった。しかし支払いは誰か別の人が行ってくれるようであり、あとで精算するために領収書をもらおうと思った。

その時、見知らぬ外国人女性が私に声を掛けてきた。歳は中年から老年にかけてぐらいであり、どこかで見覚えのあるような顔立ちをしていた。雰囲気としては、以前私がジョン・エフ・ケネディ大学でお世話になっていた学科長の持つ雰囲気と似ていた。彼女は私に、休みの期間に執筆した英文

日誌の提出を促してきた。そのようなものを書いていた記憶がなく、それは提出できない旨を伝えると、それは困ると言い出した。

よく事情が飲み込めなかったが、英文日誌の提出が義務なのであれば、日本語で書いている日誌をGoogle翻訳にかけてコピペして提出すると私は伝えた。Google翻訳が不正確なのは承知であり、英文日誌をゼロから書くことの手間を考えると、そうした形で提出するのが手っ取り早いだろうと思ったのである。すると、いつの間にかその女性はどこかに消えていた。気がつくと、もう講義の時間が迫っていた。結果として、待ち時間を潰すことをせずに済んだのだが、空き教室の使用料を支払っていたこともあり、無駄なことをしたと思った。

講義を行う教室に到着すると、すぐさま講義が始まった。それは単独の講義ではなく、ファシリテーターがもう1人いて、その男性からの質問に私が回答する形で講義が進んでいった。受講者の方々は成人発達理論に造詣が深く、最初に興味深い質問が出てきた。それに対して私の回答をいきなり伝えるのではなく、まずは他の受講者の方々がどのように考えているのかを問い返した。すると、2人ほど回答してくれ、それらの回答は素晴らしかったが、焦点の当て方がとてもマイクロなものだった。そうしたこともあり、私はより大きな観点でその質問に回答した。

説明の中で、成人発達理論を取り巻くコンテキストが2019年に大きく変わったことに言及した。そしてその際に、英語の学習のメタファーを用いて、2019年前においては、アルファベットの1つ1つを最初から学ぶことをしなければならなかったが、2019年からはアルファベットの成り立ち、つまり英語の歴史を振り返り、現代における英語を取り巻くコンテキストを考えていくことが重要であるということ、成人発達理論の学習に当てはめて説明していた。フローニンゲン:2020/12/7(月)05:42